（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	藤田　遥
論文題目	人間言語の漸進進化モデルの構築 ―レキシコンの成立過程を中心に―		

（論文内容の要旨）

本論文は、人間言語の下位機能のなかでもレキシコンの成立過程を中心に考察することで、人間言語の漸進進化モデルを提案したものである。これにより、言語進化研究における理論的枠組みを提供し、言語学内外での実証的な研究や仮説の検証に寄与することを目的としている。全体は8章から構成される。

第1章では、本論文が言語能力の起源と進化をテーマとする背景には、ヒトという種を特徴付ける言語の由来を明らかにすることで人間の本性 (human nature) に迫るという目的があることを述べる。そのうえで、この目的を達成するための具体的な方策として、本研究は理論言語学の観点から言語能力とその進化に関する仮説を提示するものであることを明確にする。

第2章では、言語進化研究の特色や特異性を確認したうえで、本論文で扱う「言語」を「複数の言語関連下位機能からなる複合的なシステム」として定義し、「言語進化」を「言語を持たないヒト祖先の状態から言語を持つヒトの状態への変化がどのように生じたのか」という問題として定義する。また、本章では、進化的に妥当な言語モデルを構築するためには複数の言語理論を統合することが必須であることを論じるとともに、本論文の根幹をなす見解として、言語の各下位機能は漸進進化の産物であるとする仮説も提示する。

第3章では、理論言語学の主要な枠組みである生成文法と認知言語学を統合するモデルを提案することで、本論文の理論的基盤を明らかにする。この章では、言語進化研究における両者の利点および欠点が相補的となっていることから、生成文法におけるモジュール的文法観を採用しつつ、認知言語学の観点から一般的認知能力や言語使用の役割、意味・概念的基盤を説明する言語モデルが有用であることを論じる。

第4章では、人間言語の構造生成部門を成すシンタクス (統語演算部門) とレキシコン (語彙部門) について、レキシコンの進化の研究が比較的遅れている状況を指摘したうえで、その解明が肝要な理由として、(1) レキシコンは構造生成部門の一員である、(2) シンタクスは言語固有の機能ではないとする「汎用併合 (Generic Merge)」の仮説を採用すれば「普遍文法 (Universal Grammar)」の候補はレキシコンに絞られる、(3) レキシコンおよび語彙項目 (lexical item) なしではシンタクスは機能しない、という3点を論じる。加えて、レキシコンに関する検討事項として、語彙項目の性質と成立過程の解明、および語彙項目がシンタクスにおいて言語併合 (linguistic Merge) の適用対象となった理由の解明を挙げる。

第5章では、分散形態論 (Distributed Morphology) の枠組みに依拠することで、本論文におけるレキシコンと語彙項目の定義を示す。現状、分散形態論の研究で進化的議論がなされることはまれだが、本章では、語をより下位の単位に分解することで各単位の進化的由来が探りやすくなるという利点から、分散形態論は進化研究においても有用であることを指摘する。また、本章では、語彙項目を概念と同一視する仮説を提

示するとともに、分散形態論における「ルート」と「機能的形態素」の2分法は理論的構築物でしかないことを論じ、両者を語彙項目としてまとめて捉えるべきであると指摘したうえで、語彙項目を「言語普遍的な語彙的・文法的意味のみを持つ要素 (概念) 」と定義付ける。

第6章では、言語進化の議論においてしばしばその重要性が指摘される「内在化」と「外在化」の共進化関係に着目することで、レキシコンの成立過程に関する仮説を示す。本章では、人間言語の概念体系は幅広い抽象度の概念を含むこと、また、普遍的な物理的・身体的基盤を持つ具象概念とは異なり、抽象概念はこうした基盤を欠いていることに注目し、レキシコンの成立につながる内在化と外在化の共進化は、(1) 概念が構造生成に利用される要素として確立する過程、(2) レキシコンに蓄えられる概念構造・語彙項目の規模と創造性が向上する過程、の2つの段階において大きな役割を果たしたとするモデルを提案する。

第7章では、原型言語 (Protolanguage) は語彙範疇 (lexical category) のみによって構成されたとする「語彙的原型言語仮説」に依拠し、原型言語から人間言語への漸進的な進化過程を説明する。この章では、原型言語は人間言語と同等の語彙範疇によって構成されていたのではなく、指示的内容も含有した未分化な語彙範疇 (原型的語彙範疇) によって構成されていたと考えることが妥当であることを論じる。また、機能範疇 (functional category) の出現に関して、語彙範疇と同様に命題内容の構築に寄与する内容的機能範疇 (contextual functional category) と、構造的情報や要素間の関係性の標示といった形式的側面に寄与する構造的機能範疇 (structural functional category) に区別して検討することが有望であることを指摘し、前者は未分化な原語 (proto-word) から語彙範疇と機能範疇が分離することで成立したのに対し (「分離仮説 (Disintegration Hypothesis)」)、後者は文法化に代表される文化進化的プロセスによって比較的後年に成立したと考えられることを述べる。

第8章では、各章の議論を総括したあと、言語進化研究全体における本論文の研究の位置付けを示す。そのうえで、本論文全体および各章の意義を述べ、本論文の課題と展望にも言及する。理論言語学の観点から漸進的な言語進化モデルを提唱した本論文は、さらなる研究の足掛かりを提供することで言語進化研究に貢献するだけでなく、人間言語の特異性や種固有性を指摘する議論が漸進進化的な観点と相容れないものではないことを示すものでもある。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、人間の言語能力の起源・進化を探求する進化言語学（ないし言語進化学）において、特にこれまで等閑視されがちであったレキシコン（語彙部門）の進化に焦点をあて、その漸進進化の可能性について独自の視点から論じたものである。進化言語学は1990年代以降、著しい発展を見せている学際領域であり、その中で言語学は確固とした理論基盤を築いて他分野に提供するという役割を担っているが、本論文ではこれまで言語学内部に見られた異なるアプローチ間の理論的対立を解消することでこれを実現しようとしており、言語学全体の健全な発展にとってもその示唆するところの大きい、優れた論考となっている。全体は8章から構成されており、概ね第1～4章が本研究の目的をはじめ、進化言語学そのものの意義や位置づけ、これまでの研究経緯、先行研究の成果などを詳述し独自の考察を加えた部分、第5～7章がレキシコンの進化について新たな提案を行った部分、第8章が全体のまとめである。

第1章では、本論文が理論言語学の観点から人間の言語能力およびその起源・進化に関する新たな仮説を提示するものであることを明確にしている。進化言語学が有する極めて高い学際性からして理論言語学の知見のみでこれを完結させることは非現実的であり、本研究の狙いも他分野における新たな研究方法や実験・検証に資するための仮説構築であることが的確に述べられている。

続く第2章では、「言語とは何か」「言語進化とはどういった現象か」という根本的問題に対する本論文の立場を明確にするとともに、特定の言語理論のみに拘泥することの不適切さを指摘し、複数の理論の利点を統合することが必要であることを説得的に主張している。また、言語進化が漸進適応進化か跳躍的進化かという論争についても、言語の各下位機能について漸進進化説を採ることが可能であることを述べている。漸進か跳躍かは言語に限らず生物進化全体の捉え方とも関連する重要な論点となっているが、ここでの提案は言語進化をそうした広い視野から捉えようとするものであり、特に注目に値する。

第3章では、理論言語学の主要な枠組みとして生成文法と認知言語学を取り上げ、これまで対立点のみが目立っていた両アプローチの利点を融合することで言語進化の妥当なシナリオが構成可能であることを主張している。これは翻って言語学内部にも新しい視座をもたらす優れた提案である。

第4章では、生成文法の観点から人間言語の2つの中核的モジュールとしてシンタクス (統語演算部門) とレキシコンに焦点をあて、後者についてはほぼ手つかずの状態であることを指摘し、この問題に取り組むことが言語進化研究の急務であることを十分な論拠をもって説いている。

第5章では、近年の形態論理論である分散形態論において提案される理論装置、例えば「狭義レキシコン」と「ボキャブラリー」の別や「ルート」と「機能的形態素」の別を出発点にして、これらを修正・発展させることでレキシコンの進化研究に取り組むという方針が示されている。語彙項目と概念を区別せず、語彙項目とは普遍的な語彙的・文法的特性のみを持つ概念であるとする議論を行っている。

第6章では、言語の主機能は「内在化」による思考であり「外在化」によるコミュニケーションは後発の副次的機能であるという生成文法の主張に対し、内在化

と外在化の共進化を主軸にした新たな言語進化モデルを展開している。単純な具象概念は他種にも存在するものの、人間独自の高度に構造化された抽象概念はこの共進化によってのみ生じることを主張している。思考かコミュニケーションかという古くからある論争に解決策を示すと同時に、言語の他種の能力との進化的連続性や外在化の重要性を指摘した優れた提案だと言える。

第7章では、「語彙的原型言語」から人間言語への漸進進化のあり方を素描している。原型言語では語彙範疇・機能範疇の分化はまだ起きておらず、人間言語において生じた機能範疇は内容的機能範疇から構造的機能範疇へ段階的に進化したと考えるべき理由を入念なコーパス調査などにも基づき述べている。

第8章は総括であり、本研究の意義を述べ、今後の課題と展望を示している。

理論言語学をベースとした言語進化研究はまだ多数行われていると言えない現状において、本論文はその先駆的な試みであると言える。特に以下の(1)〜(4)の各論点はこれまでの言語学内外における多数の論争に終止符を打ち、進化言語学全体の今後の進展にとって重要な示唆をもたらすものであり、課題も残るものの、1つの到達点として高く評価できる。(1) 言語の跳躍進化を否定し他種との連続性を重視した漸進進化を支持、(2) シンタクスのみならずレキシコンの進化的重要性を指摘、(3) レキシコンの段階的進化モデルを提示、(4) 生成文法・認知言語学双方の利点を融合。特に(4)は言語進化研究が翻って言語学内部にも大きな影響をもたらすことを示す点で、進化言語学と従来の言語学の接続可能性を考察する上でも重要な提案だと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年12月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降